

平成 22 年 6 月 26 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007 年度～2008 年度  
 課題番号：19530453  
 研究課題名（和文） 健康・医療を重点とした野宿者への包括的支援をめざす調査及び  
 公—民協働に関する研究  
 研究課題名（英文） A research on the comprehensive health support for homeless people  
 and the cooperation between voluntary and public sectors.  
 研究代表者  
 中嶋 陽子 (NAKAJIMA YOKO)  
 大阪市立大学・都市研究プラザ・特任講師  
 研究者番号：80445048

## 研究成果の概要：

- 1) 京都市、東京都、福岡県におけるホームレス支援団体の活動実態を調査研究した。
  - 2) 京都市内で生活するホームレスの人々への聞き取り調査および相談会開催を通じて、ホームレスの人々の健康状態及び医療上の問題を調査した。
- 1) の調査により、もし複数の民間支援団体の中で協力関係がうまく築けるならば、包括的なホームレス支援も不可能ではないことを示唆している点で重要であることがわかった。
- 2) の調査では、ホームレスの人々が抱える複合的な困難の一端が、特に健康医療問題を通して、ケアに到達できない悪循環の様相や医療対応策からの遺漏として、その実態が明らかになった。

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	400,000	120,000	520,000
2008 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ホームレス、医療・健康問題、ワーキングプア、包括的支援、公—民協働

## 1. 研究開始当初の背景

日本におけるホームレス問題研究は、大都市圏を中心に散発的に行われてきたが、ホームレス支援団体・行政が問題にどのように関わっているかという視点からの研究、およびホームレスの人々の健康・医療面に焦点をあてた研究は相対的に手薄である。このことが本研究着手の背景にある。

中でも筆者が精力的にかかわってきた京

都市でのホームレス支援の芽が着実に育ちつつある中、しかし試行錯誤もたいへん多く、ストレスの高い仕事であった。この試行錯誤をより先進地域での活動に学ぶことも視野に入れて、構想されたものが本研究の申請当初の申請者の問題意識であった。

## 2. 研究の目的

京都市、北九州市を中心としたホームレス

支援諸団体、NPO の活動把握と、行政との関わり方を研究する。また、ホームレスの人々の健康面・医療面での実態調査を通じて、ホームレス支援に関するニーズや課題を明らかにすることであった。とくにアクションリサーチ的に、かつ申請者が代表として関わってきた京都市でのホームレスへの「健康よろず相談会」の活動を対象として、申請者の実践を、より分析的かつ高質な、研究分野において発信できるような目的を有している。

### 3. 研究の方法

(1) ホームレス支援諸団体を訪問し、団体の成り立ち、構成、活動内容の把握を行う。また、他の団体・行政組織とどのような協力関係を築いてきたかを調査する。

(2) 京都市内で生活するホームレスの人々に健康面および医療面を中心としたアンケート調査をおこなう。

(3) ホームレスの人々に対する医療・健康面を中心とした「健康よろず相談会」を開き、その活動を通じて、当事者が抱える諸困難を把握する。相談会開催を契機に、医療関係者のネットワークを構築し、その他の支援者との接触・情報交換を恒常化できるようにする。

### 4. 研究成果

「研究成果の概要」で述べた1)に関しては、以下の論文①と発表①にまとめられている。まず京都においては、定番の炊き出しを行う団体が多く、その他、昼回りや夜回りによる安否確認を定期的に行ったり、行政と定期交渉を持ったり、当事者の会を育てたりする団体もある。各団体はそれぞれ独自の価値観のもとで活動を展開しており、団体間の恒常的な協力関係はまだ構築されていない。そのような中で論文①では、特に雑誌販売を手段とし「就労自立」のみに依存する方法について、

その限界や困難を指摘した。特に、就労以前の問題として、健康医療ケアの重要性を実態に沿って本格的に指摘している。これに関連して訪問調査をした「北九州支援機構」では、健康・医療に特別な重点的配慮はされていないものの、当事者への全体的なアプローチが確立されているため、バランスのとれた支援内容となっていることが判明した。

同時に、その後の「北九州支援機構」と非営利団体（「グリーンコープふくおか」）との協働のプロセスを見ると、京都市においても、もし複数の民間支援団体の間で協力関係がうまく築けるならば、包括的なホームレス支援も不可能ではないことが示唆される。また、京都市の民間団体では、小規模な支援団体が各々の価値観に従って小宇宙を形成しており、他方で、行政も、彼ら支援団体との公一民協働を総体的に促進することを含めて、支援サービスのグランドデザインを描けているとは言い難い。したがって、当事者にとっては支援サービスの全容は、つかみにくいものとなっている。

「研究成果の概要」で述べた2)に関しては、研究成果は論文①、③と発表②、③である。そもそも、「健康よろず相談会」は、当事者の医療ニーズに基づき、大阪保険医協会の協力のもとでサービスを実施したことには端を発している。強調されるべきは、「相談会」が、京都市内ではじめて医療関係者の現場へのコミットの重要性を提起し、その後の定着に主要な役割を果たした点である。同時に、医療者と支援者との連携についても、意識した行動をとっている。具体的には、相談会は、医科チーム、歯科チーム、生活・福祉相談担当チーム等を配し、またフードバンクから供出された食料の提供も行うという形態をとる。すでに06年の第一回目には、40人の当事者が来場し、その後例年、53人、40人と、来場者数は安定している。サービスを提供する支援者・ボランティア側も、毎年50人前後で推移している。その間、医療者と支援者のネットワーク形成がすすんだため、医療支援の内容は、より専門的に、有機的になった。特に、退院後の当事者が再度路上に戻

ることを予防し、該当者には、確実に居宅保護での継続的療養を実現している。それまでは、当事者の会からも、路上退院となるケースをしばしば聞かされていた。

さらに、07年末より、「健康よろず相談会」のグループは、日常的な健康医療支援という問題意識のもとで、キリスト教系グループに働きかけ、医療受診へのつなぎを積極的に行ってきた。これを機に医療者の参加数や活動量が増え、現在このキリスト教系グループは、地元の医療機関2箇所と連携が取れるようになった。「相談会」グループによる意識的なアクションが、他団体の医療ネットワークの形成に決定的な役割を果たした例である。

ただし、当事者の目から見れば、京都では個々の支援団体の特異性にしがって支援サービスが提供されがちなため、それが必ずしも包括的な内容になっているとは限らない。はからずも、アメリカ型 Continuum of Care モデルの限界性と重畳する。この点は、「もやい」への訪問調査においても、類似性をみとめた。それに対し、「北九州支援機構」の訪問調査からは、当該団体が当事者に伴走しつつ、バランスのとれたトータルなサービスを網羅し・提供していることが観察された。当事者の立場から見れば、後者の方が利便性にも富み、支援内容が一括了解できる利点もあるため、より選好される可能性が高いと、推察される。

相談会や日常活動全体を通していえることは、路上生活者が抱える複合的困難が、健康医療問題という領域で、端的に明らかになったことである。路上生活者には心身の健康上の問題を抱えている人が多いこと。ホームレス状態が長く続くほど、当人にとって病院や公的機関の敷居は高くなり、医療券が取得しやすいにもかかわらず病気になっても病院に行かない、各種の社会サービスや生活保護申請への足も遠のく、といったケースが増えること。いったん病院に入院できても、行政と病院側との齟齬や、本人の理解能力や表現能力の問題もからみ、必ずしも居宅保護へつながるわけではないこと。ホームレス状態から脱却するための歩みには、このように健康問題一つを取り上げてみても、通常では想像しにくい多種多様なリスクや困難が重層

的につきまとう、という現実が具体的に明らかとなった。

京都市における医療券発行制度は、それを単独で他府県と比較したとき、行政による相対的に「進んだ」医療対応策として、評価できないわけではない。しかし、他方で知的障害者・精神障害者やそのグレーゾーンに位置づく人々が一定割合存在することを勘案すれば、この医療券制度のはざままで救済されずに、路上死や路上退院となる人々がいることは、予測可能な事態である。複合的な困難の最初的一端を解くためにも、支援者や第三者による入・退院時を通じたフォローは、伴走型ケアの必要性ばかりではなく、当事者の権利擁護・利益擁護の観点からも、必要不可欠である。

聞き取りからも、行政や市職員労働組合は、退院時の順当な生活保護の継続の重要性については認識しているものの、実態を把握してはならず、「(退院即保護停止などは)ありえない」とのコメントであった。

したがって、今後は、行政関係者や支援関係者が、以上のような実態を共通認識とする機会を設けることが、第一の課題である。この研究によって、そのための実態に即した材料が準備された、ともいえる。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

- ① 中嶋陽子、「京都市内の困窮者・路上生活者支援を通して」、『ねっとわーく京都』No. 243、2009年4月、pp. 36-40 (査読なし)
- ② 中嶋陽子、「ホームレス問題を『支援』と『研究』の狭間で考える」、『協う』Vol. 110、2008年12月、pp. 16-19 (査読なし)
- ③ 中嶋陽子、「京都市内における健康・医療支援ネットワークの立ち上げ」、Shelter-less No. 35、2008 Summer、pp. 3-13 (査読なし)

[学会発表] (計3件)

- ① 中嶋陽子、2008年6月22日、「第56次

高校生のつどい春季討論集会」でホームレス問題について講演（聖母女学院短期大学）

- ② 中嶋陽子、2008年2月6日、大阪就労福祉居住問題研究会・全国ホームレス支援ネットワーク共催「全国ホームレス支援シンポジウム」で報告。題名「京都市におけるホームレス支援の流れ—専門職ネットワークの試みから—」（憲政記念会館 東京）
- ③ 中嶋陽子、2007年6月9日、ホームレス全国支援ネットワーク設立総会で京都のホームレス支援状況を報告（東京）

〔その他〕

- ① 2007年4月～京都市市民活動総合センターのスマールオフィスに「健康よろずプラザ」として入居。活動の拠点とする。
- ② 2007年5月～虹の連合「もう一つの全国ホームレス調査」に加わり、京都市のホームレスの人々へ聞き取り・アンケート調査を行う。
- ③ 2007年9月9日 第2回「健康よろず相談会」開催（キャンパスプラザ京都）。相談会后、病院同行、福祉事務所同行等のパーソナルサポートを継続的に行う。その様子はNHK 京都放送局より取材をうけ、近畿一円でTV放送された。
- ④ 2008年1月～3月 京都市内のホームレスの人々への健康ニーズ・要望アンケート調査。
- ⑤ 2008年3月9日～10日 東京の「もやい」、民主医療連合会本部、新宿連絡会医療関係者への訪問調査。
- ⑥ 2008年3月15日 京都新聞より取材があり「健康よろずプラザ」の活動中の写真

が掲載される。

- ⑦ 2008年3月27日～28日 北九州支援機構への訪問調査。
- ⑧ 2008年3月16日 「京都市ボランティア・市民活動見本市フェスタ」へ「健康よろずプラザ」としてブース出展。
- ⑨ 2008年8月31日 第3回「健康よろず相談会」開催（キャンパスプラザ京都）。相談会后、病院同行、福祉事務所同行などのパーソナルサポートを行う。
- ⑩ 2009年3月27日 京都市のホームレス担当管理職や市職員組合の関係者、民間医療関係者にホームレス対策について聞き取り調査。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中嶋 陽子 (NAKAJIMA YOKO)  
大阪市立大学・都市研究プラザ・特任講師  
研究者番号：80445048

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし